

第7回 幸せはお金で買えるか

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)等。



イースタリンの逆説

豊かさと幸福度が比例するか、幸せはお金で買えるかについて多くが論じられている。自由市場経済を万能とは認めない人々は、両者の不一致を示す事実に着目する傾向がある。このため、「イースタリンの逆説」が引き合いに出されることが多い。1970年代、米国の経済学者のイースタリン(Richard Easterlin)が「第2次世界大戦後に急速な経済発展を遂げた日本における生活に対する満足度は、低下している」という調査結果を基に、「経済成長だけでは国民の幸せは量れない」という「イースタリンの逆説」を提唱した。所得水準と生活満足度(well-being)は、ある時点の一国内ではゆるく相関しているが、時間を超えた2時点や地域を越えた2地点ではほとんど相関がないとするものである。

ところが、近年、多数の国で行われるようになった国際共同調査によれば、生活満足度でも、幸福度でも、豊かさとの相関は認められるという研究成果があらわれ、海外の有力経済誌でも

紹介されるようになった。「これまで命題の証拠がないから命題は当てはまらないと混同されてきた」というわけである(The Economist(2010))。

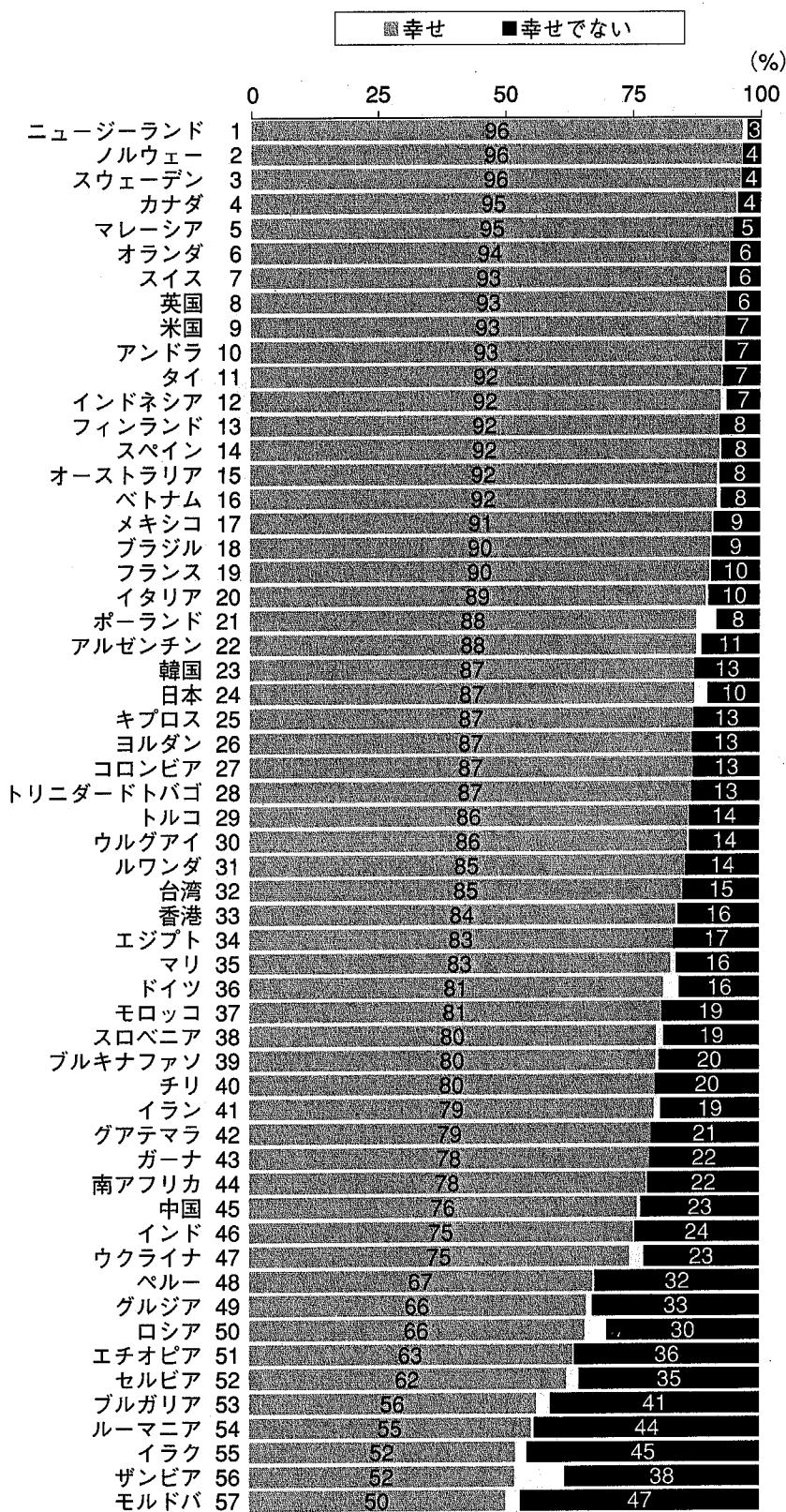
そこで、本稿では、この研究でも使われている世界価値観調査という国際意識調査の最新データを使用して、幸福度と所得水準の国別相関があるかを探ってみることにする。

どの国の幸福度が高いか

幸福度と所得水準の国別相関を見る前に、まず、国ごとの幸福度自体を概観する(図1)。本稿で「幸福度」と呼ぶのは、「非常に幸せ」及び「やや幸せ」の回答率の合計である。

最も幸福度が高いのはニュージーランドの96.4%である。あまり細かい差は無視した方がよいので、小数点以下を四捨五入した数字を図に掲げたが、これによればニュージーランドとともにノルウェー、スウェーデンが96%で、世界の中で最も幸福度が高い国である。反対に、幸福度が最も低いのはモルドバの50%であり、ザンビアとイラクが52%とこれに次いで幸福

図1 幸福度の国際比較（2005年前後）



注) 各国の全国18歳以上男女1,000~2,000サンプル程度の回収を基本とした国際共同意識調査の結果。「幸せ」は「非常に幸せ」「やや幸せ」の合計、「幸せでない」は「あまり幸せでない」「全く幸せでない」の計、それ以外は「分からない」、「無回答」。

資料) World Values Survey HP (2011.1.2)

度の低い国となっている。

表1に、幸福度を仮に高・中・低に3区分し、大陸別の分布を整理した。このように整理してみると、幸福度の世界分布は大陸別に比較的分かりやすいパターンとなっている。

まず、幸福度の高い国は、北欧と北米・オセアニア（及び同じ英語圏の英國）と東南アジアに集中していることが分かる。ヨーロッパでは、おおむね北欧>中欧>南欧>東欧・旧ソ連諸国（体制移行国）の順に幸福度が大きくばらついている。ドイツは、こうした順番の中ではやや例外的に幸福度が低い。ラテンアメリカ、中東・北アフリカ、サハラ以南アフリカでは、高幸福度の国はなく、中と低の幸福度に分布している。

アジアの幸福度分布は、東南アジアで高く、中国を除く東アジアが中幸福度、中国、インドは低幸福度ときれいに地理的に分かれているのが印象的である。儒家文化圏の東アジア（中国を除く）は、東南アジアと比べると経済発展度が高いが、幸福度では逆転していることから、幸福度を左右する要素として、文化、あるいは国民性を無視できないことがうかがわれる。

表1 大陸別の幸福度分布

	ヨーロッパ	北米・オセアニア	ラテンアメリカ	中東・北アフリカ	サハラ以南アフリカ	アジア
高幸福度	ノルウェー スウェーデン オランダ スイス 英国 アンドラ フィンランド スペイン	ニュージーランド カナダ 米国 オーストラリア				マレーシア タイ インドネシア ベトナム
中幸福度	フランス イタリア ポーランド キプロス ドイツ スロベニア		メキシコ ブラジル アルゼンチン コロンビア トリニダードトバゴ ウルグアイ チリ	ヨルダン トルコ エジプト モロッコ	ルワンダ マリ ブルキナファソ	韓国 日本 台湾 香港
低幸福度	ウクライナ グルジア ロシア セルビア ブルガリア ルーマニア モルドバ		グアテマラ ペルー	イラン イラク	ガーナ 南アフリカ エチオピア ザンビア	中国 インド

注) 同じ欄の中では上から幸福度の高い順。なお、幸福度3区分の高、中、低は、それぞれ、92%以上、92%未満80%以上、80%未満であり、単に分布を分かりやすくするために設けた便宜的なものである。

男と女のどちらの方が幸せを感じているか

次に、男女別の回答結果から、女性の幸福度が男性を上回っている程度を示したグラフを掲げた(図2)。これによれば、日本の値が2.3%ポイントであり、上から第11位である。

女性の幸福度が相対的に高い国は、所得水準の高低で2グループに分けることが可能である。

- ①高所得グループ：香港、台湾、オーストラリア、韓国、日本
- ②低所得グループ：イラク、エジプト、イラン、南アフリカ、ブルキナファソ、トリニダードトバゴ、キプロス

高所得グループは、オーストラリアを除くとすべて東アジア諸国である。東アジア諸国の中で女性の幸福度の方が低い国は中国だけである。

東アジア諸国はかつての儒教国としての性格を共有し、欧米諸国と比較すると家庭や社会の中での女性の地位が低いと考えられているが、

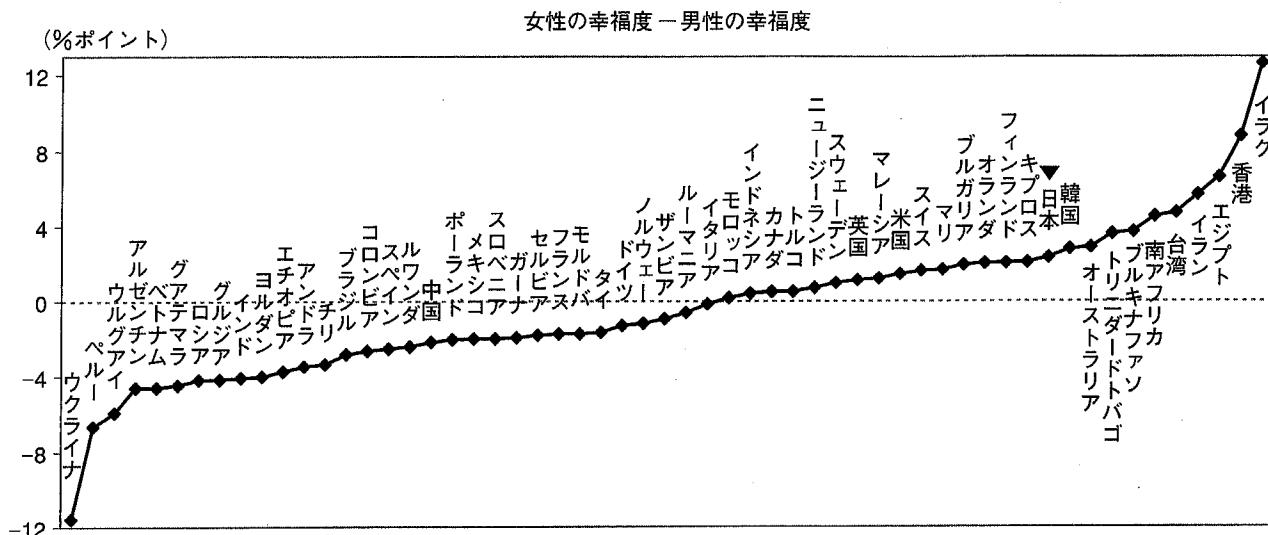
高所得国では、幸福度にそれが反映しているわけではなさそうである。むしろ、男性の権利ばかりでなく責任も大きかった過去の伝統に引きずられて、男性の方が幸福度を感じにくくなっているのではと想像される。これが、また、上で指摘したように東南アジアより東アジアの幸福度が低い一つの理由ともなっている。

本連載の第3回「生まれ変わるとすれば男?女?」では、男女の幸せに関連した日本女性の意識が戦後大きく変化したことについてふれたが、これは、どうやら日本だけでなく、経済発展とともにあって家族関係が大きく変化した東アジア成長国に共通の現象であることがうかがわれる。

低所得グループは、イラクのような紛争国、あるいは国内に問題を抱える国が多い。こうした国では、女性が幸福というよりは男性が不幸に陥りやすいのではと想像される。

女性の幸福度が男性より低いことで目立っているのは、ウクライナ、ロシア、グルジアといった旧ソ連諸国やペルー、ウルグアイ、アルゼン

図2 男と女のどちらの方が幸せを感じているか



注・資料) 図1と同じ

チングといった南米諸国である。欧米先進国の中では、スペイン、フランスといった南欧の低さが目立っている。

幸せはお金で買えるか

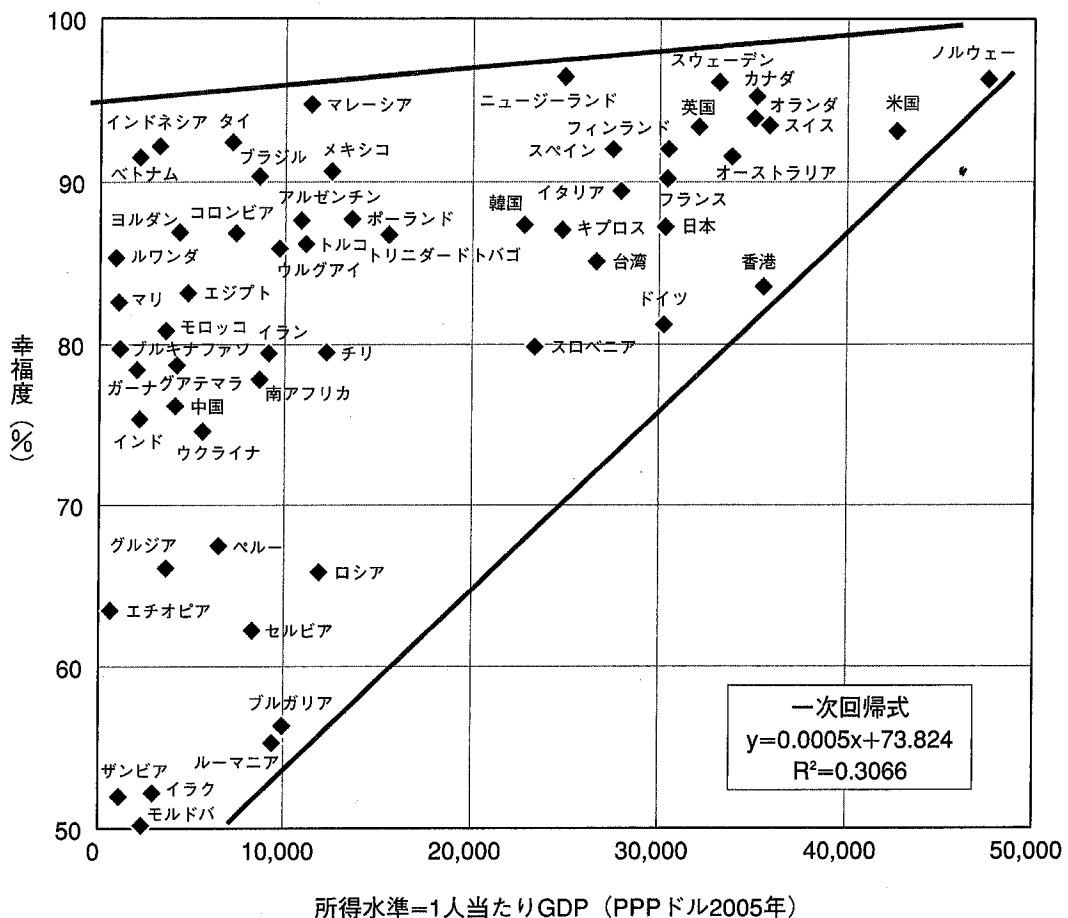
それでは、幸福度と所得水準の国別相関図を見てみよう(図3)。相関度をあらわす R^2 値は0.3066であり、まあまあの相関が認められる。

しかし、相関図を見て、より印象的なのは、所得水準の高い国では幸福度がある一定水準以上に収斂している(不幸を感じている者はそれほど多くない傾向がある)のに対して、所得水準の低い国では、幸福度に大きなばらつきが認められる点である。

こうした相関パターンは「片相関」として理解できるように思う(拙著『統計データはおもしろい!』(2010) 参照)。お金持ちでも不幸かも知れないよ、という貧乏人の慰めは、事実に反するが、貧乏でも幸せに暮らそうという態度は、十分な合理性を持っているといえよう。幸せはお金で買えないが、不幸からの脱却はお金で買えるのである。

従って、経済成長が重要なのは幸福を増すからというより、不幸を減じるからであるということが分かる。貧しさを経験した者には、このことは自明なことだと思われる。“漢江の奇跡”と呼ばれた韓国の高度経済成長を描いた韓国テレビドラマ「英雄時代」(2004年MBC)の中で、朴正熙(パク・チョンヒ)大統領は、自分と同じ貧困家庭の出身の現代(ヒュンダイ)財閥の創始者に、料亭で酒を飲み交わしながらこう語っている。「私は貧しい家の生まれだ。だから生理的に金持ちが嫌いだ。だが、貧しさはもっと嫌いだ」(第40話)。金持ちになりたいから経済成長を実現したいのではなく、貧困からの脱却のためそれが必要なのだという宣言である。1961年の軍事クーデターの結果生まれた朴正熙政権は、途上国において経済成長を民主的にではなく強権的に図る開発独裁の代表例であり、当時韓国の民主化勢力はこれに強く反撥したが、新聞に比べ反権力で知られる韓国のテレビ界も高度経済成長を達成した後から振り返って、朴正熙政権にプラスの歴史的評価を与えていているのである。

図3 幸せはお金で買えるか（所得水準と幸福度の国別相関）



注) 幸福度は「非常に幸せ」及び「やや幸せ」と回答した比率の計であり、各国の全国18歳以上の男女約1,000～2,000人を対象として実施された世界価値観調査（2005年前後）による。ここでは世界価値観調査実施国57か国中、アンドラを除いて所得データが得られる56か国を対象としている。

資料) World Values Survey HP (2011.1.2)

IMF 「World Economic Outlook Database」 September 2011

先進国においては、経済成長と所得再配分のどちらが優先されるべきかという議論の中で幸福と所得の非相関が主張されるが、途上国側からは、これを途上国に当てはめられても迷惑だという意見の食い違いが生じる。片相関は相関ありと相関なしの同時存在なので、こうした混乱が生じるのだと思われる。

なお、男と女のいずれの幸福度の方が国の所得水準と関係が深いかを見るため、男女別々に一次回帰式の係数とR²値を算出してみると、男は4.8%(1万ドル当たり)、0.254、女は5.6%(1万ドル当たり)、0.343であり、女性の方が係数

が2割ほど高く、かつ、明らかに相関度が高くなっている。女性は、経済発展によって不幸を減じ幸福を増す程度が、男性より大きいといつてよからう。

*参考文献

- [1] The Economist (2010) : Comparing countries – The rich, the poor and Bulgaria : December 18th 2010.

*「社会実情データ図録」関連図録

- [1] 図録9480「幸福度の国際比較（世界価値観調査）」
[2] 図録9482「幸せはお金で買えるか（所得水準と幸福度の国別相関）」
[3] 図録9484「男女の幸福度の国際比較」